Osaka Shoin Women's University Repository

変容する「男性身体」
―プロレスラーの身体装飾に着目して―

学芸学部　被服学科　川野佐江子

要旨：本論の目的は、プロレスラーの身体装飾に着目することで、現代社会において「男性身体」がどのような状況におかれているのか、を見ることにある。そのことは、近代以降その覇権性を保ってきた男性中心主義が社会でどのような現状におかれているのか、を俯瞰することでもある。このことはジェンダー概念が、現代社会の構造を明らかにする上でどれほど有効性を保持しているのか、という一つの疑義を含んでいる。それはつまり、男性女性という二項対立を分析軸にした身体性の問題に対する疑義でもある。ジェンダー概念では分析しきれない身体性の在り様について、特に「男性身体」をテーマにして、論じていく。

キーワード：プロレスラー、男性身体、ジェンダー概念、身体装飾

0. はじめに

化粧学において、化粧研究を進めるにあたり頻繁に登場する用語として「身体装飾」がある。この「身体装飾」をどのように定義するかは、この用語を用いる研究領域、研究者や、研究へのアプローチ方法で異なるが、次の二つの分け方を基準に区別されることが多い。その一つ目は、「身体装飾は、直接素肌に対して行われる瘢痕（皮膚面に傷をつけたあと、塗彩（顔料などを塗りつける）、文身（いれずみ）などに限定して用いられるのが一般で、衣服や着衣とは区別する」[1]という区分の仕方である。二つ目は、「身体装飾の語義を拡大して、化粧から装身具、服装までを一貫して包括的にとらえ」[2]るという区別の仕方である。前者は人類学、民俗学などの学問領域で用いられることが多い。後者は、文化人類学の一部や、社会学的領域で見られる用いられ方ある。

これらを踏まえ、本論では後者の解釈を基本において「身体装飾」を捉えることとする。つまり、その装飾の着脱可能性にかかわらず、社会的文化的な意図のために加えられた加工や装飾の総称として「身体装飾」を捉える事とする。ここで、加工も装飾に含んでしまうのは、いささか乱暴ではないかという意見もあるだろう。一般に、装飾とは原材料に何物かを付け加えることであり、加工とは原材料その物に手を加えることだからである。しかし、身体装飾の定義の一つ目で述べた「瘢痕」などは、身体加工であるとも言えるだろう。中国の纏足文化やヨーロッパにおけるコルセットなども、身体加工であるが、それは社会における「美的なもの」に向かう一つの装飾行為としての意味も含むだろう。このように考えてくると、本論で扱いたい問題は「装飾が加工か」という問題ではなく、その身体上に加えられる造形が、われわれの現代社会をどのように象徴しているのか、ということである。このことから、本論ではこれら身体に何事かを表出する行為を「身体装飾」という用語で統一して論じていくこととする。

1. 本論の目的と構成

1.1. 目的

本論の目的は、プロレスラー[3]の身体装飾に着目することで、現代社会において「男性身体」がどのような状況におかれているのか、を見ることにある。そのことは、近代以降その覇権性を保ってきた男性中心主義が社会でどのような現状におかれているのか、を俯瞰することでもある。

近年の日本社会では、「草食男子」に象徴されるような従来型の「男らしさ」とは異なるイメージをもった男性のあり方がマスコミを中心に取り上げられている。しかし、この現象を取り上げて、従来型男性性の崩壊であると直線的に分析するのは安易すぎるだろう。なぜなら、「草食男子」は従来型男性性を基底にもった存在だからである。換言すれば「草食男子」は男性

Osaka Shoin Women's University Repository

らしからぬ男性であり、つまりは男性ではない何者かであって、「草食男子」であるか否かは、やはり従来型男性性との対比によって決定されるからである。男性を基点とし、そことの対立軸を作り上げて事象をとらえようとすること、まさにこれこそが男性中心主義的志向なのである。

さて、本論は冒頭に述べたように、プロレスラーの身体装飾を通して、フェミニズムが発見したこの男性中心主義を俯瞰していく。このことはジェンダー概念が、現代社会の構造を明らかにする上でどれほど有効性を保持しているのか、という一つの疑義を含んでいる。それはつまり、男性女性という二項対立を分析軸にした身体性の問題に対する疑義でもある。ジェンダー概念では分析しきれない身体性の在り様について、本論では論じていく。

1.2. 構成

本論の構成は次の通りである。まず、「0. はじめに」で、本論が論じる「身体装飾」のとらえ方を、化粧学的な立場から説明する。つづく本章「1. 本論の目的を構成」では、本論の目的を、身体性を論じるにあたり、ジェンダー概念の有効性を一度疑ってみることとし、論文構成を提示する。次に次章「2. プロレスラーの身体装飾とはなにか？」では、アスリートの身体装飾の例を挙げていきながら、特にプロレスラーの身体装飾の特徴について述べていく。つづいて「3. プロレスラーの身体装飾に顕れる「男性身体」」では、プロレスラーの例を提示しながら、現代社会における「男性身体」の意味とその変容について論じていく。最後に「4. おわりに」では、現代社会における「男性身体」の俯瞰作業を終えたところで、それらの分析軸に使われたジェンダー概念の有効性についてまとめる。

2. プロレスラーの身体装飾とはなにか？

2.1. アスリートの身体装飾

プロレスラーの身体装飾について述べる前に、競技者つまりアスリート全体の身体装飾について述べておこう。

アスリートの身体装飾については、西村がアスリートの自我感情表出パフォーマンスの一つとして類型化している[4]。西村は特に「美的表出」という言説を用いて、「行為者（競技者）の美的感情が身体表面の「加工」あるいは「装飾」として可視化されるということ」（西村 2009:3.）として、入れ墨（タトゥー）、ピアス、眉剃り・カラーリング、コスチューム・ユニフォームなどを挙げている。西村が列挙するアスリートたちは、アマチュア・プロの両方を含んでいる。たとえば入れ墨の例では、プロサッカー選手のデイヴィッド・ベッカム[5]やアメリカのプロバスケットボールのマイケル・ジョーダンの「Ω」[6]のほか、アマチュアの陸上競技選手の例などを挙げている。ピアスの例では特に陸上競技選手に多いことを指摘し、外国の選手だけでなく日本の女性アスリートの例なども挙げている。眉剃り・カラーリングの例では、1998 年冬季長野オリンピックのジャンプにおける金メダリスト、船木和喜選手が細く眉を剃っていた例を挙げ、現在では一般化されていることを述べている。一方、中学生・高校生の部活動においては、眉剃りやカラーリングは禁止対象であることも付け加えている[7]。コスチュームでは、女子テニス界、フィギュアスケート、シンクロナイズドスイミングの他、1988 年ソウルオリンピック女子陸上競技選手のフローレンス・ジョイナーのハイレグコスチュームを挙げている。特に、コスチュームの例では、身体の露出に着目して点が興味深い。

スポーツとくに近代スポーツとは、ヨーロッパ産業革命以降に成立したスポーツを指す。そこでは合理主義に基づき、ルール、用具、施設、マナーを共有していることが前提になっている。競争原理と能力主義に基づき、記録や順位を争うものが近代スポーツである[8]。スポーツを通して、強靱な肉体はもとより、統率力、判断力、自制心、忠誠心などを養うというのが近代スポーツの目的にあったわけだ。したがって、そこでは華美な装飾は排除されており、スポーツと身体装飾とは相容れない関係にあった。しかし、近年のスポーツはプロ・アマに関わらず観客を意識してショウアップ化されてきていると言えよう。世界陸上競技選手権大会をテレビで中継するのに、あるキー局がその放映権を独占し、有名俳優や元アスリートなどをゲストに迎えてショウアップしていたのは記憶にも新しい[9]。一方、インターハイや高校野球のような学校教育の場で展開されるスポーツの場合は、身体装飾自体が校則違反とされることが多く、その場合身体装飾は禁止されている。これは、近代スポーツの目的をそのまま教育実践として取り入れているからだ。

プロのスポーツ選手が、自らの身体を商品化して装飾を加えるのは商業主義の社会では、当然の現象と言えよう。しかし、その結果、社会人以上のスポーツ界では、身体装飾においてもはやプロとアマチュアの境界線は曖昧になっているかのように見える。アマチュ

Osaka Shoin Women's University Repository

ア選手はプロ選手をモデルとするし、プロ選手もその装飾（ファッション）を一般社会から取り入れる。相互に取り入れを繰り返す結果、プロとアマチュアの身体装飾における境界線は曖昧になっていくのだ。

ところで、西村のスポーツにおける身体装飾の類型化から、二つ抜け落ちているものがある。それをここに挙げておくことにする。まず、女子アスリートに見られるメイクアップとネイルアートである。これは1988年ソウルオリンピックの女子陸上競技選手フローレンス・ジョイナー以降、多く見られるようになってきた。ジョイナーのメイクやネイルアートの華美さは、女性性を強調するものであったが、彼女がそのような身体装飾を施したのは、肉体の男性化を隠蔽するためだとも言われている。それは、スポーツ界の記録至上主義が歪んだ形で関わりを持つようになったドーピング問題[10]との関連がある。このドーピングと深く関わるのが、本論が特に注目した筋肉の増強という身体装飾である。

筋肉の増強は、アスリートにとっては至上命題でもある。多くの競技の場合、筋肉をいかに調整させるのかが記録への第一歩であり、アスリートは筋肉を鍛える。この筋肉の増強も西村による身体装飾の類型から抜け落ちている部分の二つ目である。

面白いことに、西村の類型から抜け落ちたこれら二つの要素は、前者はいわゆる「女性らしさ」の表象であるメイクアップとネイルアートであり、後者は「男らしさ」の表象であるたくましい肉体であった。つまり身体性を男性女性で区別した際の両極であることがわかる。しかしさらにこれら二つの関係を追求すると、実は両極でなく一極であることに気がつく。後者のような身体に直接関わる問題には、男性は関与しないというのが男性中心主義での観念である。近代知＝理性ではどうにもならないもの（例えば感情、身体性など）は、男性が関与する対象ではなく、女性が担う対象である、という志向が男性中心主義の近代パラダイムにある。肉体やセクシュアリティの問題が女性に付与されてきたのは、このパラダイムによるものである。したがって、理性ではどうにもならない肉体を、その理性でもって鍛え上げることが、男性に許された唯一の自己の身体への関与方法だったのである。メイクアップとネイルアートが女性の領域におかれているのと同様、身体は女性の領域におかれているというわけだ。つまり、メイクアップとネイルアート、そして筋肉の鍛錬は、どちらも女性性側という一極におかれているということがわかるのだ。この件については「3. プロレスラーの身体装飾に顕れる「男性身体」」で詳述する。

2.2. プロレスラーの身体装飾

これまでいくつかのアスリートにおける身体装飾について述べてきた。それを踏まえここでは本論の題材でもあるプロレスラーの身体装飾とは何かについて述べていく。

まず、彼らの身体装飾の前提になっていることは、彼らの身体が徹底的に一つの商品であることにある。プロフェッショナルである以上、それは回避できない運命にある。レスラーの身体装飾には、拙稿[11]でも述べたように裸体を意識した脱毛、タンニングのほか、入れ墨（タトゥー）、コスチューム（ヘアスタイルやマスクを含む）などが挙げられる。いずれも各レスラーのギミックとしてのアイデンティティ[12]に即して設定される。しかし本論で特に抽出したい身体装飾の分析軸は、前節の最後に述べた、筋肉の増強である。それは、次のような理由による。まずプロレスラーは、多くが裸体を基本にパフォーマンスを行うこと、つぎにその裸体のフォルムつまり筋肉の付き方それ自体が、男性美としての商品価値を発動させるからである。

そしてもう一つプロレスラーの身体装飾の分析軸として取り上げたいのが、振る舞いとしての身体装飾である。「0. はじめに」で述べたように、本論では身体に何事かを表出する行為を「身体装飾」という用語で統一して論じていくこととした。身体に何事かを表出できる行為には、皮膚の上に何事かを表出させる装飾のほかに、身体の全体に何事かを表出させる行為つまりパフォーマンスや振る舞いも含むことができる。その意味において、プロレスラーがプロレスラーとして取る振る舞いを検討してみる、というのが分析軸の一つである。

2.2.1. 筋肉の増強という身体装飾

以上のような二つの分析軸に着目して、プロレスラーの身体装飾について述べていく。まず筋肉の増強という身体装飾について述べる。

一般に格闘技のアスリートは、筋肉の量や身体自体の大きさによって競技に対する優位性を担保できる。対戦相手より力強く、大きいことが、肉体を直接ぶつけ合う競技として有利に展開することはよく知られていることである。したがって、ボクシング、柔道、レスリング（時にはプロレスにも）などには、階級という体重別の対戦規制がある。WWEにおいても、その

Osaka Shoin Women's University Repository

タイトルに WWE チャンピオンのほか、重量級のレスラーに世界ヘビー級チャンピオンが用意されている。さらに、やや軽量級のレスラーが獲得するタイトルとしてインターコンチネンタルチャンピオンが用意されており、明確な体重制限がない代わりに、このような配慮がなされている[13]。とはいえ、プロレスにおいて華々しい位置づけに置かれるのは重量級のプロレスラーが中心であるのが現状である。したがって、プロレスラーたちはその身体をできるだけ大きくすることに躍起になるのである。

一方、プロレスラーたちの筋肉質な身体は、単純に競技に勝利するためだけにあるのではない、という点がプロレスラーの身体装飾における特徴となる。先に述べたように、彼らの身体は徹底的に一つの商品であることが運命付けられている。言い換えれば、商品として観客に披露できる身体であるのかどうか、が問題になる。観客に披露できる身体とは、一般の人々つまり観客自身とは大きく異なる身体であること、それも肯定的な意味で人々に驚きを与えるスペクタクル性が備わっている身体であることである。換言すれば、お金を払って観に行く価値がある身体かどうか、という意味になる。スペクタクル性が強調されるプロレスラーには例えば、1970 年代から 80 年代にかけて活躍したアンドレ・ザ・ジャイアントがいる。彼は、身長が 7 フィート 4 インチ（約 223cm）、体重が 520 ポンド（約 236kg）という巨体のレスラーであった。彼は非常に大きな体格に加え、レスリング技術の高さからもプロレスラーとして非常に高く評価され、この時代の WWE を牽引したレスラーの一人である。大きな身体をさらに大きく見せるために、ヘスタイルをカーリーヘアするという身体装飾も行っていた。しかし、彼の体格は、いわゆる筋骨隆々としたマッチョではなかった。それでも、プロレスという興業においてその“人並み外れた”身体は充分にスペクタクルであり商品価値が高かったわけである。80 年代になると、アンドレ・ザ・ジャイアントの次の世代として“超人”ハルク・ホーガンや、“マッチョマン”ランディ・サベージなどの、筋肉を強調した体躯のレスラー全盛時代になる。特に、ホーガンはレスリングの技術への評価はあまり高くないが、ボディビルで鍛え上げた大きな筋肉を披露し、リング・パフォーマンスにも優れている点などから、興業としてのプロレスにおいて、最も成功したレスラーという評価を受けている。コスチュームも黄色や赤を基調としたタイツやノースリーブのシャツを用い、リング・インのパフォーマンスでは、そのシャツを自ら左右に大きく破り裂いて、胸の筋肉を露わにするという独特のスタイルを作り上げた。一方サベージもその“マッチョマン”というニックネーム通りの身体を作り上げ、コスチュームもホーガンよりさらに派手で華美なものであった。しかし、ホーガンと異なりレスリングの技術でも高く評価されており、後の世代のレスラーへの影響も大きい。

80 年代以降、これら筋肉をある意味人工的に増強させたタイプのプロレスラーが主流になってくる。90 年代以降のプロレスラーでは、ハンター・ハースト・ヘルムスリー（Hunter Hearst Helmsley（以降 HHH））が筋肉を強調したレスラーとして挙げられる。HHH の同世代レスラーとしては、ザ・ロック、スティーブ・オースチン、カート・アングルなどが挙げられるが、基本的に筋肉が強調される彼らの身体は、その筋肉の付き具合や、反対に脂肪の付き具合が外見からも分かりやすいということが言える。たとえば、ケガなど何かの理由でトレーニングができなかった場合、その身体の変貌は観客には一目瞭然である。明らかに筋肉が小さくなり代わりに胴回りなど身体のごく一部ではあるがそこに弛みが見られるようになると、観客はレスラーとして今後の活躍になにか影響があるのではないか、と懸念や疑念を持つのである。怪我をしているのか、レスリングへの関心が薄れたのか、年齢的限界に達したのかなど、プロレスラーの身体装飾の特徴である筋肉は、常に外部から観察されるものとして表出されている。プロレスラーの筋肉は、プロレスラー自身の所有から離れて外部へとその所有者を変えているのである。これはまさに、プロレスラーの身体がプロレスラーの個的なアイデンティティを離れ、公共物になっていくと言い換えることが出来るだろう。個的でない身体は、商品として消費されていくことになる。

プロレスラーが主体としてストイックに自身の筋肉を作り上げれば上げるほど、商品としての身体は彼の主体性を離れ、物体化することで消費される。身体装飾を考えるとき、「装身の主体と中心こそが人間なのだということを私たちは改めて認識する必要がある」（石山 1982）という考えに意義は申し立てない。しかし、プロレスにおける身体装飾では、装飾を極めた結果、その身体が個的な人間を離れて、全体的なもの中へ取り込まれていくことになるのだ、という点を指摘しておきたい。

2.2.2. パフォーマンスや振る舞いという身体装飾

つぎに、身体のに何事かを表出させる行為としての

Osaka Shoin Women's University Repository

パフォーマンスや振る舞いについて述べていく。スポーツ競技におけるパフォーマンスや振る舞いは、実はプロレスだけに見られる現象ではない。しかし「プロレスはそれ全体がサービス・パフォーマンスのようなもの」（西村 2009）と述べられるほど、プロレスにおける特徴的な身体装飾であると言える。プロレスに見られるパフォーマンスは、観客をいかに歓喜させられるかという目的のために完成していることが多い。先述のハルク・ホーガンは、リング・イン・パフォーマンスの T シャツを引き裂くアピールのほか、たくましい腕を振り回して観客を煽り誘いながら、自らの耳に手を添えて、自分への声援を要求するパフォーマンスで有名である。スティーブ・オースチンは、試合終了後にリングに投げ入れられた缶ビールをいくつも乱暴に空け、両手に持った二缶から同時にビールを口の中に流し込む、というパフォーマンスを行う。ザ・ロックは自らを “The Rock[14]” あるいは “People’s Champion” と称する極めて自己中心的なキャラクターとして試合前やロッカールームでのマイク・パフォーマンスを行った。彼のマイク・パフォーマンスは非常に人気が出て、レスリングだけでないエンターテイナーとしての才能を開花させたと言ってよい[15]。

これらのパフォーマンスは、相手への威嚇、自己への鼓舞などを目的としていると言えるだろう。しかし、さらに踏み込んで検討するなら、これらプロレスラーの威嚇や鼓舞のパフォーマンスは、その目的自体を完成形として観客に見せるという重要な目的を持っている。すべては、観客を主体としたパフォーマンスであり、この意味で、プロレスラーの身体装飾はすでにプロレスラー自身のものでは無くなっている。

ところで、プロレス以外で見られる威嚇や鼓舞のパフォーマンスには、どのようなものがあるのか。二つ例を挙げておく。まず、ムエタイの「ワイクルー」と呼ばれる試合前に行われる舞踏がある。これは試合前に師に感謝し、神に勝利を願うという意味があり、儀礼として行われている。ヘッドベルトを着け、民族音楽に合わせてリングを回り、ひれ伏したり胸の前で手を合わせたりという動作を行う。

ワイクルーのように音楽を試合前に使用するというパフォーマンスは、実は WWE でも効果的に行われている。現在、WWE のレスラーは個別にテーマソングを持っており、その音楽にのってリング・インするというのが定番となっている。同時に炎や煙なども使用されるが、自分のテーマソングにあわせて、自分独自の「型」を披露しながらリングに入るのである。たいていの場合、いわゆるリングまでの花道のある箇所で歩みを止め、歌舞伎で言う見栄に相当するポーズを取ることが多い。広い会場でのクローズアップ効果を狙っていると同時に、これからゴングまでの間の緊張感と臨場感を高める効果を持つと考えられる。この花道での身体装飾は、プロレス興行におけるたいへんショウアップされた場面の一つもあり、レスラーの身体は一気に観客の元へと届けられることになる。「お決まり」のテーマソングに「お決まり」のポーズが展開され、それらを共通体験として共有した観客たちは、これから始まるエンターテイメントの世界（非日常の世界）へ引き込まれていくのである。

もう一つの威嚇、鼓舞のパフォーマンスの例としては、ニュージーランドのラグビー代表チームである「オール・ブラックス」の「ハカ」が有名である[16]。ハカはもともとニュージーランドのマオリ族が戦いの前に行う威嚇と鼓舞を目的とした舞である。現在のニュージーランドでは、国賓など海外からの来訪者があった場合、それを歓迎する意味で披露されている。ハカは英語では War Cry と呼ばれ、戦闘的な舞踊と思われがちであるが、実はニュージーランドでは一般的な民族舞踊として受容され、結婚式やお祝いの席などでも披露されている。

ニュージーランドのラグビー代表チームの試合前に行われるハカは、1905 年に英国遠征時に初めて披露され、以降国際試合の前に行われることが伝統的に受け継がれていった。そのオール・ブラックスのハカであるが、2005 年になって新しいハカが披露されている。それが「カパ・オ・パンゴ（Kapa o Pango）」[17] というハカである。それまでのハカは「カ・マテ（Ka Mate）」と呼ばれるものであったが、カパ・オ・パンゴは最後に相手を睨みつけながら、親指を自分の首に突きつけて横に引く動作、つまり首を斬るという動作が含まれていた。もともとハカは「カ・マテ！カ・マテ！カ・オラ！カ・オラ！（私は死ぬ！私は死ぬ！私は生きる！私は生きる！）」と力の限り叫びながら行う所作がユニークなのであるが、国際試合で相手の首を斬るという動作は問題だと言うことになり、現在ではその問題の部分は胸の前で親指を横切らせるという動作に変更されている。

この首斬りの動作であるが、実はプロレスの中では時々見られる動作の一つである。最近では、クリス・ベノワやアンダーテイカーがこの動作を行う。ベノワは、どちらかというと小柄な身体の持ち主であるが、鍛え上げられた肉体の結果、特に関節技に定評がある

Osaka Shoin Women's University Repository

レスラーだった。ところがベノワは、ある試合で技の失敗から相手の首を折ってしまい、以降「The Clipper」というニックネームがつけられた。これを踏まえ悪役のギミックを与えられたベノワは、試合の最後に相手のへの最後通牒の振る舞いとして、ハカと同じ首斬りの動作を行うのである。現実の事故とプロレスという虚構の中の出来事が交錯するこの振る舞いに、観客は虚実の境目があやふやになる感覚を満喫するのである。

もう一人の首斬りを行うレスラーのアンダーテイカーThe Undertaker は、その名の通り葬儀屋、墓堀人という不気味性を強調したギミックを与えられているプロレスラーである。彼は WWE レスラーの中でもかなりの長身であり、そのコスチュームは黒一色のレザーロングコートで、まるで悪魔の形相である。リング・イン後、深々とかぶったつばの広い帽子を取り外す際には、白目で舌を出すという奇怪なパフォーマンスを行う。彼のギミックには常に「死」がつきまとっており、彼のレスリングの終幕にも、ハカやベノワと同じ首斬りの動作が行われるのである。

ラグビーのようないわゆるパブリックスクール発祥の“紳士のスポーツ”で、ましてや国際試合での首斬りポーズは許されようもないかもしれない。しかし、ことプロレスという虚実が折り混ざったような世界では、首斬りという振る舞いは威嚇、恐怖を表すとても分かりやすい記号として使用されている。そして同時に、この試合がもうすぐ決着するのだということを周知させるための記号でもあるのだ[18]。

ここで注意しておかなければならないことがある。それは、プロレスラーの身体装飾を考える際に、観客の存在無くしては考えられないという点だ。本論ではすでに前節で、プロレスラーの身体は観客を介在して公共物となると述べた。パフォーマンスや振る舞いという身体装飾においても、観客の介在無しに論じることは出来ない。この点について岡井は観客の中でもとくにファンに着目し「ファンが一種の解釈共同体（interpretive community）として位置づけ可能なことが分かる。」（岡井 2010:139.）と述べている。プロレスラーの身体装飾は独特の文化資本として記号化されており、そこでの解釈がなくてはパフォーマンスとしても、身体装飾としても成立しない。つまりプロレスラーのパフォーマンスや振る舞いという身体装飾には、プロレスラーの身体を観客に委ねなければ完成しないという、プロレスラーのアイデンティティにとってはジレンマが存在するのだ。

プロレスラーのアイデンティティを論じるときに、観客についての議論が重要になってくる。本論では、プロレスファンについての研究は深く追求しないが、別途検討することが必要な課題の一つである。バルトも『現代社会の神話』のなかで、プロレスラーの身体について次のように述べている。

レスラーの身体は、闘い全体を萌芽状態で含んだ、基盤となるような記号を制定している。（バルト 1957＝2005:13）

プロレスラーの身体において、数々の記号が制定されているとしたら、その表出はプロレスラーの身体表象を通して可視化できると言えるのだ。

プロレスラーの身体装飾が記号の表出の場として、今まで述べてきたロッカールーム、試合前、試合の終了時のパフォーマンスのほかに、試合中に行われるパフォーマンスもある。しかしむしろそれは振る舞いbehavior と称した方が適正かと思われる。それがバンプ bump である。バンプについてバルトの引用を次に紹介する。

床に押さえ込まれると、大げさにマットを叩いて、すべての人々に彼の状況の耐え難い性質を印象づける。要するに彼が作成するのは、自らの不満をめぐって延々と作り話を続ける気難し屋といった、面白おかしいイメージを、彼が正当に体現しているのだと、観客に理解させる目的を持った、諸記号の複雑な総体なのである。（バルト 1957＝2005:13）

観客に届けられるのは、〈苦痛〉、〈敗北〉、〈正義〉の偉大なるスペクタクルである。（バルト 1957＝2005:14）

バンプとは「やられ技」である。相手からの攻撃を受けると、吹っ飛んだり、転倒したり、時には跳ね上がったりする動きである。バンプのプロレスにおける最大の効果は、相手の技の強さや大きさを誇張して観客に見せることができ、ショウアップにつなげることにある。それと同時に、その衝撃をかわして身体的ダメージを最小限にするいわゆる「受け身」のテクニックでもある。このバンプは、プロレスラーの身体装飾の中でも、特に観客の介在と彼らによる解釈を必要とする現象である。リングで展開されている技が、どれほどのダメージを相手に与えているのか、あるいは、与えているように見せられているのか、を観客側が読み取り解釈し、試合全体を観客個々人が作り上げるのであ

Osaka Shoin Women's University Repository

る。観客はプロレスラーの身体装飾に顕れる記号を読み解くだけの知識が必要であり、その観客の解釈力に依存してバンプは存在しているといってよい。

しかし一方、岡井は観客について、けして観客は一枚岩ではなく、そのもちえるプロレス文化への文化資本によって階層化されると述べている。とくに、P.ブルデューの文化資本論を基盤として「プロレスファンの文化資本とは、端的に言えば、プロレスに関する知識やその知識の応用能力を意味する。」（岡井 2010: 126）と説明している。このことは、本論で述べてきているプロレスラーの身体装飾に対する解釈も、けして一枚岩ではないことを表している。

プロレスラーの身体装飾に表出する記号は、プロレスラー個人のアイデンティティから離れ、観客を介在して観客の解釈に依存する。つまり、その身体が個的な人間を離れて、全体的なもの中へ取り込まれていくことになるのだ。しかし、一度全体的なものに取り込まれた解釈は、文化資本の違いによってその解釈内容は階層化され、いつしか個的なものへと還元されていく。

この流れをプロレスラーの身体が象徴する「男性身体」と関連付けて、次の章で述べていく。

3. プロレスラーの身体装飾に顕れる「男性身体」

ここで一度、本論で述べてきている「プロレスラーの身体装飾」についてまとめておく。

まず、ほかのアスリートの身体装飾と同様に、入れ墨（タトゥー）、ピアス、眉剃り・カラーリング、コスチューム・ユニフォームは、プロレスラーの重要な身体装飾要素である。次に、本論で特にプロレスラーの身体装飾として提示したいのは、脱毛、タンニングのほか、大きく発達させた筋肉、そしてパフォーマンスや振る舞いである。以上の身体装飾の要素はすべて記号として、観客によって解釈されていく。したがって、プロレスラーの身体装飾は観客の解釈に委ねられて初めて意図を発する存在となる。つまり、プロレスラーがその身体装飾に表象しようとしたプロレスラー自身のアイデンティティも、観客の解釈に任せた流動的な存在として、プロレスラーの主体性から距離を置くことになっていく。「プロレスラーの身体装飾」は、こうして記号の一つとして誰のものでもあり、誰のものでもないものとなる。

それではこれから、このように考えてきた「プロレスラーの身体装飾」を、現代社会における「男性身体」を検討する題材として改めて考察していくこととする。

3.1. 筋肉とパフォーマンスに注目する

先に述べたように、「プロレスラーの身体装飾」というと、実はとても幅広い要素が含まれていることが分かるだろう。そこで、本論では、筋肉を強調した身体と、その身体を駆使して行われるパフォーマンスを中心に論じることで、「男性身体」が包括する問題へ接近していくこととする。

3.1.1. プロレスラーの筋肉と「男性身体」の関係

『スポーツの魅惑とメディアの誘惑』[19] で阿部は次のように述べている。

今さらあらためて言うまでもなく、格闘家は強さや逞しさの象徴と見なされてきた。格闘＝闘いというスポーツで競われるのは、身体的かつ精神的な「強さ」にほかならない。そして興味深いことに、多くの格闘技はこれまで「男のスポーツ」と考えられてきた。・・・（引用者による中略）・・・。闘う男／強い男の象徴としての格闘家。そのイメージはきわめて魅力的でもある。「男らしさ」や「男性としての魅力」を存分に備えた人物として人びとは格闘家を讃え、その存在に憧れる。（阿部 2008:65。）

阿部が述べるように、格闘技＝「男らしさ」とイメージする人びとは、未だ多いだろう。近年では、オリンピックにおいても、男性だけあるいは女性だけという競技種目はだいぶ少なくなってきた。2008 年の北京オリンピックでは、ボクシング、野球は男子のみの競技であり、シンクロナイズドスイミング、新体操、ソフトボールなどが女子のみの競技であった。しかし、オリンピック競技種目にはなっていないが、男子のシンクロナイズドスイミングは行われているし、女子ボクシングは次回 2012 年ロンドン大会において正式種目と決まっている。また、2010 年には日本女子プロ野球機構が発足し、女子のプロ野球選手が活躍を始めている。また、冬季オリンピック競技のスキー・ジャンプも女子の競技として採用しようとする動きが出ている。このように、男性だけあるいは女性だけが行ってきたスポーツ競技は、減少する方向にある。とはいえ、格闘技から「男らしい」のイメージが払拭されているわけではない。それは何故か。その理由は、格闘技が他の競技と異なり、主に、自分の肉体だけを使って攻撃や防御を行う競技である、という点にあるだろう。還元すれば、なにも身につけない状態の身体で闘う競技であり、そこで優劣を競うためには身体能力を

Osaka Shoin Women's University Repository

高めるための鍛錬が必要になってくる。その鍛錬は、やがて大きく発達した筋肉を作り上げる。男性の方が相対的に女性より筋力があるとういことは、知られているが、次のような調査がある。

体重と除脂肪体重について考えると、絶対筋力に大きな男女差があることを一部説明できるだろう。相対筋力（relative strength）とは、絶対筋力を体重あるいは除脂肪体重で除したもの、あるいは体重や除脂肪体重に対する絶対筋力の比率である。古典的な研究によると、女性のベンチプレスの 1RM は男性の 37%であった。これを体重比の相対筋力で表すと女性の筋力は男性の 46%、除脂肪体重比の相対筋力で表すと女性の筋力は男性の 55%となる。(「相対筋力の男女差」http://www.bookhousehd.com/pdffile/02309.pdf 2011.7.11)

ここから分かることは、男性女性のセックスにおいて、すでに筋肉量は男性の方が多いということである。したがって、身体が大きいこと、あるいは逞しいことはそれだけで「男性身体」の特徴になることが分かる。格闘技では、身体の強さが競われるのであるから、より大きく強い筋肉を持つ者が有利となる。格闘技の勝利者は、男性間の闘いの中で優位に立つのであるから、「男の中の男」、「男らしい男」ということになる。

そのように考えてくると、筋肉に象徴される「男性身体」には、まず「力」が要求されると言ってよい。プロレスラーの身体装飾でもっとも注目されるのがその身体の屈強さであるとういことは、「男性身体」に求められる要素に「力」があるのだ、ということを具体的に物語っている。

次に、この筋肉に象徴される「男性身体」に求められる「力」は何も物理的な力だけではないことを述べておかなければならない。近代以降の男性中心主義では、理性で整理できることは男性が担うもの、その逆に理性では納まらないものに対しては女性が担うものとされてきた、というのがフェミニズムの理論にある。具体的に言えば、秩序や規範は男性が担うもの、それに対し秩序や規範が禁止を求めるもの―精神性、身体性、セクシュアリティなど―は女性が担うものとして、それぞれ対立軸として位置づけられてきた。議論の便宜上、前者を「マスキュリニティ」、後者を「フェミニティ」としておく。これを踏まえ、これまで述べてきた筋肉に象徴される「男性身体」が、物理的「力」だけをシンボル化しているわけではないという先の文脈の説明していく。

そもそも身体は、アイデンティティをしまい込む器であると同時に、アイデンティティを表出させる場でもある。アイデンティティは自我が創出されると同時に出現するものであるから、理性で論じることができる存在とも言える。したがって、アイデンティティは「マスキュリニティ」であることが言える。一方、その身体は、たとえば悲しい時に涙が流れたり、病気になったりと、理性ではどうにもならない動きを見せることが日常的にある。涙が流れないようにするには、悲しいと感じることを理性で抑圧してみせるとか、病気にならないためには理性で健康的な予防行動を続けるとかといった、身体への理性による制御が行われる。つまり、本来「フェミニティ」である身体を「マスキュリニティ」によって抑圧する、ということになる。その際の行動を、人びとは「我慢」だとか「精神力」だとか「努力」、「克服」などと言う。プロレスラーの身体装飾の例に鑑みれば、プロレスラーの力強い身体を作り上げるための日々の苦しいトレーニングや鍛錬は、放置すればそのまま理性の手が加えられない「フェミニティ」な身体を、「マスキュリニティ」をもって凌駕する、という行為に他ならない。この行為を人びとはフィジカルな「力」に対し、メンタルな「力」、として賞賛するのである。ここに来て、はじめて理性によって制御され統一された身体としての「男性身体」が完成する。物理的、精神的な「力」の象徴として、プロレスラーの身体装飾は受容されていくのである。

3.1.2. プロレスラーのパフォーマンスと「男性身体」の関係

プロレスラーのパフォーマンスは、威嚇や鼓舞を目的としてはいるが、純粋に感情の高まりを主体的に表現しているということとは異なる、ということを、本論の 2.2.2. で述べた。プロレスラーの威嚇や鼓舞のパフォーマンスは、その目的自体を完成形として観客に見せることが第一義の目的であり、パフォーマンスすべては、観客を主体とした働きかけである。この意味で、パフォーマンスというプロレスラーの身体装飾は、すでにプロレスラー自身のものではなく、観客の解釈によってはじめて意味づけがされる。これらプロレスラーのパフォーマンスを「男性身体」との関係で論じるなら、観客との間に主体のやりとりを行っているという点から検討していこう。

前節でも述べたように、「男性身体」とは「マスキュリニティ」によって「フェミニティ」を克服した身体

Osaka Shoin Women's University Repository

であることが言える。したがって、単なる身体とは異なり、明確に理性が支配する存在である。理性が存在するところには自我が存在し、自我は主体を現出させる。ということは、「男性身体」には常に主体性が存在するということになる。

それでは、プロレスラーの身体装飾としてのパフォーマンスにおいて、主体はどのような状態にあるのか、再び確認してみよう。たとえば、1996 年アトランタオリンピックのレスリングフリースタイル 100kg 級の元金メダリストのカート・アングルのリング・インパフォーマンスである。彼はアマチュアレスリング界のエリートであり、アメリカ合衆国の英雄でもあった。その栄光を持って WWE へ入団しベビー・フェイスとしてデビューしたのだが、観客はそのエリート振りを歓迎せず、一気にヒールへと転向する。そういった背景をもつカートのリング・イン・パフォーマンスは、星条旗をイメージした柄のアマチュアレスリング型のコスチュームで登場し、両腕を突き上げ「No. 1」と指を差し上げ、アメリカン・エリートを全身で表現しながらテーマソングとともにリング・インする。その時会場にいるほぼ全観客たちは、テーマソングに合わせて「You Sucks!」（罵倒語）と繰り返し叫ぶのである[20]。実際にカートはスポーツ・エリートであり、そのアイデンティティは揺るがないほど自信に溢れていても、何ら不思議ではないキャリアの持ち主である。それが、WWE というプロレス界においては、相対する受け入れがたいアイデンティティとして、観客から解釈されたのである。以降、カートの身体装飾に顕れる彼のアイデンティティは、すっかり観客のものとして一人歩きし、「苦々しいもの」「受け入れがたいもの」として受け入れられることになる。カートの身体装飾における主体は、こうして剥奪され、観客たちを主体としたアイデンティティとして、誰のものでもの無く、かつ誰のものでもある存在へと変容するのである。

以上、カートの例からプロレスラーのパフォーマンスとしてに身体装飾と「男性身体」の関係を検討すると、実は相容れない関係にあることが分かる。先にも述べたように、「男性身体」には確固たる主体がある。一方、パフォーマンスとしてのプロレスラーの身体装飾には、明確な主体がない。「主体がない＝アイデンティティがない」であるから、パフォーマンスとしてのプロレスラーの身体装飾は理性では克服できないもの「フェミニティ」なものとして存在していることになるのだ。

プロレスラーの身体装飾と「男性身体」との関係を、プロレスラーに特徴的であるところの「筋肉」と「パフォーマンス」から検討した結果、それぞれとの関係がまったく逆方向へと向いていることが発見できた。なぜこのような異なる関係性が生じるのだろうか。

3.1.3. プロレスラーの筋肉とプロレスラーのパフォーマンスの違い

前節で判明したプロレスラーの身体装飾と「男性身体」との関係における疑問は、プロレスラーの筋肉とプロレスラーのパフォーマンスがどういう場で展開されている身体装飾なのかを考えると整理されていく。

まず、プロレスラーの筋肉である。すでに述べているように、プロレスラーが「男性身体」を獲得するためには、「フェミニティ」を越える必要がある。むしろ、「フェミニティ」を凌駕すると言って良い。乱暴に還元するなら、「フェミニティ」を敵対するものとして「マスキュリニティ」に取り込む作業である。つまり、プロレスラーの筋肉という身体装飾は、常に理性の側、「マスキュリニティ」の側にて行われている行為だと言って良い。もっと簡単にいえば、筋肉を付けるという身体装飾行為は常に、自我と相対しながら行われているということである。

一方、プロレスラーのパフォーマンスとしての身体装飾はどうだろうか。これもすでに述べてきたことであるが、パフォーマンスの際はその主体が身体の持ち主であるとは限らない。むしろ、観客が主体となってプロレスラーの身体装飾を解釈する。主体無き身体として存在してしまうため、「男性身体」にはなれないのである。簡単に言い換えれば、プロレスラーのパフォーマンスは、不特定多数の観客と相対する場面で行われているということである。

一見、格闘技は「男らしさ」に直結し、プロレスラーの身体装飾もその範疇に納まるものと考えられがちであった。しかしプロレスラーのパフォーマンスという身体装飾においては、そうではなかったことを、これまで述べてきた。それをさらに、ボードリヤールの消費論によって説明すると、次のようになる。

プロレスラーの身体装飾で、自分に向かって筋肉を作り上げることと、観客の前でパフォーマンスすることとの決定的な違いは、その場面が商品化されているかどうかである。筋肉を作り上げる場は、あくまでもプロレスにおけるバックヤードでの出来事である。一方パフォーマンスは、プロレスのまさに興業そのものであり、その観客たちの前ではプロレスラーの身体、その身体装飾、記号はすべて消費の対象として存在す

Osaka Shoin Women's University Repository

る。「男性身体」を象徴するようなプロレスラーのパフォーマンスは、さらに「男性身体」を強調する記号として繰り返しコピーされて消費され、ついにはオリジナルの「男性身体」のパロディへと変容してしまうのだ。したがってそれは、無意識に信じられてきた従来の「男らしさ」とは異なるものである。あえて言説化するのならば〈男性身体〉と表記するような存在である。この〈男性身体〉がパフォーマンスを通して観客たちの間で消費されていく中で、パフォーマンスとしてのプロレスラーの身体装飾に時折垣間見られた主体性は完全に消滅していく。そしてプロレスラーの身体装飾は、純粋に一つの記号として消費されていくことになる。そのパフォーマンスには、もはや観客たちやプロレスラー自身の中で、わずかでも共有されるような統一性は見られず、個々ばらばらに散っている状況なのである。

しかし、現代の消費社会は、そのままの状況で静止することはない。まったくの記号、まったくのオブジェとなったプロレスラーのパフォーマンスという身体装飾は、そのオブジェ性にフェティッシュなエロスを含んで再構築される。そこで再構築された存在は、〈男性身体〉から変容し再構築された《男性身体》として消費されていく。

4. おわりに―「男性身体」→《男性身体》までの変容で見えるジェンダー概念の位置づけ

これまで、プロレスラーの身体装飾を題材にしながら、「男性身体」どのような位置づけで存在しているのかを検討してきた。それは、フェミニズムが発見した男性中心主義に基づくジェンダー概念を俯瞰してみようとする試みであった。そう考えた背景には、実は実感としての「ジェンダー概念への疑義」があったからだ。

昨年 2010 年の大学一年生に向けた基礎演習の授業の中で、筆者は学生たちに「「男らしい」と「女らしい」を絵に描き、それを口頭で説明しなさい」という課題を与えた。学生たちは、「男らしい」はスーツや髭、スポーツや筋肉などを描き、「女らしい」には化粧、スカート、ロングヘアなどを描いた。130 人のほぼ全員がこれらのイメージを描き出し、わずか数名の学生が抽象的で会ったり、シンボリックな絵を描いていた。あまりに画一的な学生たちの回答に、その理由を尋ねると、学生たちはジェンダー概念を実感として持っていないのだということが分かった。学生たちは性差別がよろしくないことも知っているが、特に性差で嫌な経験もなく、イメージできる性差は極めてステレオタイプなものばかりであった。また、ファッションや社会システムにおいて、すでに性差自体が無くなってきているということも、知っている。したがって、ジェンダー概念が問題にしてきた男性中心主義への関心も実感も希薄であり、つまりは性差において何も問題意識を持っていないのであった。

こういう実態の中で、男女の性差を対立軸に使って議論するジェンダー理論は、現実の社会構造を分析する手法として有効なのだろうか、という問いが筆者の研究テーマには含まれており、本論もその問いへの回答を希求する手法の一つであった。

そういった研究背景を踏まえ、本論で得られた知見は次の様に論じられる。

プロレスラーの身体装飾に着目することで得られたことは、「男性身体」という近代知の象徴が、現代において二つの流れで存在しているということである。一つの流れは、プロレスラーの筋肉としての身体装飾との関係で判明した、主体的自己によって「男性身体」が自己増殖的に存在し続けるということである。もう一つは、プロレスラーのパフォーマンスとしての身体装飾に見られた流れである。そこでは近代知の象徴である「男性身体」が商品化される際に、あるいは消費社会構造の中で少しずつ変容し、〈男性身体〉さらに変容して《男性身体》へと止まることなく姿を変えるということである。

特に、後者の流れは、ジェンダー概念の疑義への問題にわずかだが回答を与えてくれた。それは、社会と個という対立軸自体が、すでに記号化しており、実際には社会も個もその境界線を曖昧にしているという現実である。プロレスラーの身体装飾が、いったい誰によって何を目的に行われているのか、そう問うことがすでに無効化しているような社会状況である。ジェンダー概念が指摘する社会的性差の「社会的」がもはや曖昧になっているとしたら、果たしてジェンダー概念はどれほど有効なのだろうか。この件については、身体論の立場からさらなる検討を深める必要があるだろう。

註

1　石山彰、「―化粧学のすすめ―　装身文化としての化粧」、『化粧文化』No. 07、1982.11.:4.

2　―――、「―化粧学のすすめ―　装身文化としての化粧」、『化粧文化』No. 07、1982.11.:6-7.

3　本論で取り上げるプロレスラーとは、特に WWE

Osaka Shoin Women's University Repository

（World Wrestling Entertainment）というアメリカのプロレスリング団体に所属しているレスラーでを指す。

4　西村秀樹、『スポーツにおける抑制の美学―静かなる強さと深さ』世界思想社、2009

5　ベッカムは、背中の「守護天使」をはじめ、身体の全体にいくつもの入れ墨を入れていることで有名である。

6　ギリシア語の「最高」という意味として入れている。

7　2004 年 11 月 26 日、日本高校野球連盟主（高野連）は野球部員がまゆ毛にそり込みを入れたり、髪を茶色に染めたりすることを禁止するように通達をした。この背景には、高校野球のテレビ中継を見た視聴者から、一部選手の姿へのクレームが日本高野連に相次いだという理由があった。

8　近代以前のスポーツは、娯楽として受容されていた。

9　2011 年の世界陸上競技選手権大会は TBS テレビが独占放映した。

10　ドーピング問題についての議論は別の機会にて行うこととし、本論では追求しない。

11　川野佐江子「「男性身体」としてのプロレスラーの身体表象」『大阪樟蔭女子大学研究紀要』2010.3.

12　プロレスラーのアイデンティティには、個人としてのアイデンティティ、プロレスラーとしてのアイデンティティ、ギミック（それぞれのレスラーに与えられた人格）としてのアイデンティティの三つがある。

13　WWE チャンピオンタイトルは、体重考慮をしていないが、結果として、体格の良いレスラーが獲得する機会が多い。

14　日本では「ロック様」と翻訳されている。

15　ザ・ロックは後にハリウッドに進出し、ドウェイン・ジョンソンという本名で俳優に転向し、『スタートレック:ヴォイジャー』『ハムナプトラ 2/黄金のピラミッド』、『スコーピオン・キング』などに出演している。

16　ハカはニュージーランドチームだけでなく、トンガ代表チームなどでも行われる。

17　カパ・オ・パンゴとは、「黒い服の戦士と銀の羊葉」という意味で、オール・ブラックスのユニフォームの黒と胸に刺繍されたチームのシンボルマーク「シルバーファン」の意味でもある。つまりカパ・オ・パンゴとは、オール・ブラックスのため専用につくられたハカである。

18　時にはこの終了間近の合図が裏切られるということもある。観客を裏切ることでさらに試合結果への予測を混乱させようという意図からである。

19　阿部潔、『スポーツの魅惑とメディアの誘惑』世界思想社、2008

20　この罵倒語が広まった後、カートのテーマソングのタイトルは「I don't Sucks」に変わった。

文献

ロラン・バルト、「プロレスする世界」『現代社会の神話』、（下澤和義訳）、1957＝2005、みすず書房

小林正幸、「プロレス社会学への招待　イデオロギーとテクスチュア」『現代思想　2 月臨時増刊　総特集プロレス』、2002、青土社

石山彰、「―化粧学のすすめ―　装身文化としての化粧」、『化粧文化』No. 07、1982.11.

西村秀樹、『スポーツにおける抑制の美学―静かなる強さと深さ』世界思想社、2009

川野佐江子「「男性身体」としてのプロレスラーの身体表象」『大阪樟蔭女子大学研究紀要』2010.3.

阿部潔、『スポーツの魅惑とメディアの誘惑』世界思想社、2008

Osaka Shoin Women's University Repository

The Metamorphic "Male Body": Focusing on Body Adornment of Professional Wrestlers

Faculty of Liberal Arts, Department of Clothing Science
Saeko KAWANO

Abstract

The purpose of this paper is to study the status of the male body in modern society by focusing on the body adornments of professional wrestlers. Androcentrism remains a relevant issue even in modern times, and this paper studies the current extent of androcentrism, including doubts as to whether the concept of gender itself is socially valid. In other words, there is doubt about whether it is correct to say that the body has two clearly-defined sexes. The main point raised in this study is that it is impossible to completely analyze a body's state in terms of gender, with particular focus on the male body. First, this paper defines what is meant by body adornment. Next, body adornment of athletes is discussed, along with that of professional wrestlers. From this angle, this paper explores the meaning and characteristics of "the male body". Finally, it provides an overview of the status of the male body in modern society and summarizes the effectiveness of the concept of gender as an analytical method.

Keywords: Male body, professional wrestler, gender, body adornment